研究室紹介

恒例になりつつある研究室紹介。今回も４つの研究室にお邪魔しました。研究室紹介について、ご意見ご要望がありましたら、飛翔編集委員会までにお知らせ下さい。

（学生編集委員：野田忠幸）

堀越孝雄研究室　C422（自然環境研究コース）

先生は編集委員に対し熱っぽく、そして丁寧に微生物のお話をして下さった。また“頭よりもどれだけ情熱を持って自然と接するか”と、自然を相手にする研究で大切な姿勢や心構えなどを諭して下さった。

▲前段左側が堀越先生

【研究内容】

◆生態系の縁の下の力持ち、微生物の働きを科学的に明らかにすること。

（1）様々な生態系において、微生物バイオマス（生物量）とそのターンオーバータイムを測定し、微生物を経由する物質量を見積もり、生態系の物質循環における微生物の役割を定量的に解明すること。

（2）根菌、内生菌類、根圏微生物などの微生物（主に菌類）と植物との共生現象の解明と、それらを用いた環境修復技術の開発。

（3）さまざまの生態系における微生物相の変遷と、その機構の解明。

【研究室の学生から先生について一言】

★不言実行・愚行移山タイプ

【総科生にアドバイス、研究室のＰＲ】

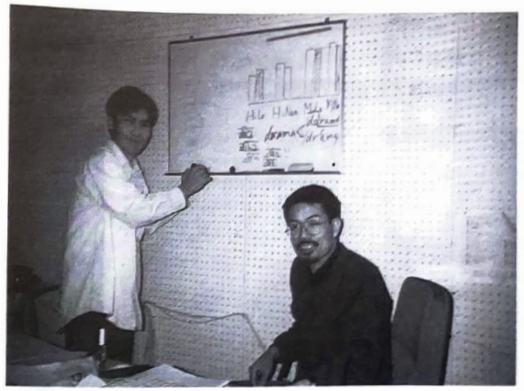
◆自然な生活習慣を身につけること。学問の基礎と、英語の読み・書き・会話、正しく味わいのある日本語を書くことをしっかり勉強しておいてください。
ひたすら泥臭く、猛烈、前向き・楽天的に頑張ってください。

◆微生物という地味で、まだまだわからないことの多い生物について研究することにロマンを感じている人間の集団です。

★自分自身の興味・関心があることについて研究できる。

山田純研究室　A330（外国語コース）

先生はディスレキシア（難読症）について、研究室を難読相談室として一般からの相談を受け付けていらっしゃる。日本では最近まで見過ごされていた分野だそうだ。教育者としての熱意が感じられるが、山田先生と長いのおつきあいがある学部４年生（本記事取材時）の高島さんの言葉の中にも、先生に対する深い尊敬の気持ちがうかがわれた。（『広大フォーラム』27期５号に先生の記事が掲載されています。）



▲右側　おヒゲが似合う山田先生

【研究内容】

◆心理言語学という学際的な領域にて、言語学習と言語情報処理の研究を行っている。　知能は低くないのに読み書きができない子が多い。そのような子供のメンタルレキシコンを明らかにし、そこから効果的な指導原理を模索する。

★借用語を手がかりに英語をやっている日本人学生を対象として実験を行い、メンタルレキシコン（心の辞書）の姿に迫ろうとしています。

【先生から研究室の学生について一言】

◆言語学、心理学、教育学、哲学、数学など幅広く勉強して欲しい。そのような基礎力があってこそ、言語にかかわる事象から広く深い洞察が得られる。

【研究室の学生から先生について一言】

★髭をたくわえ、常に研究のことを考えている。「酒と書物と娘さん（と奥さん）をこよなく愛している。」それと先生を見ていて思うのは「うーん、教育者だ」ということ。大変優しく親切な先生です。

【総科生にアドバイス、研究室のＰＲ】

◆小学生や中学生の家庭教師をしていて国語や英語が著しく苦手な子供に出会ったら、Ａ３３０に相談に来てください。

★先生は昨年まで、その分野に興味のある人は、学年を問わず参加できるサイコリングゼミというのをやっていました。私は、先生方と触れあう中で楽しかったことやトクをしたことが一杯ありました。07、06生の皆さん（05生も）、勉強、遊び、いろんな面で先生方と仲良くなっておきましょう。

堀忠雄研究室　A227（生体行動科学コース）

研究室の皆さんが、自分のテーマを持っていて、毎日実験室はフル稼動の状態。
深夜の実験などにも関わらず、皆さんのやる気で研究室の雰囲気はとても明るい。
被検者を志願したら、気付くことのなかった自分を見つけられるかも。

▲中央が堀先生

▲実験室の中で

【研究内容】

◆入眠時幻覚の体験過程を脳の電気活動の様相からさぐる。
◆老人のライフスタイルが睡眠生活習慣に及ぼす影響の研究
◆音楽や匂い刺激の覚醒・鎮静作用に関する研究
◆睡眠脳波の自動分析に関する基礎的研究

【先生から研究室の学生について一言】

◆院生は学会発表がようやく楽しくなってきたようで、科学的な討論の基礎が備わってきたように思います。学部生は4年生が二人、3年生が二人、気力と体力には充分自身のある人たちで、徹夜の実験も明るくこなしています。

【研究室の学生から先生について一言】

★朝から夜遅くまで大忙しの先生。話題が豊富でいろんなことを知っていらっしゃるのでとても為になります。私たちの心のお父様。とても尊敬しています。

【総科生にアドバイス、研究室のＰＲ】

◆睡眠と夢の研究を基礎から応用まで幅広く研究しています。意識、覚醒、睡眠、眠気、幻覚、夢などが研究室のキーワードです。最近、快適な睡眠環境として「アメニティー」、高齢化社会での眠りについて「老化」がさらに加わりました。体力と気力に加えて、センスとデリカシーのある学生にぴったりの研究室です。
◆文系領域のテーマを理系の手法で分析するとか、理系領域のテーマを文系の枠組みで考察するなど、学際的な活動はどの研究分野でも進んでいます。幅広い知識と技術を身につけて欲しいと思います。
★普段あまり気にかけていない睡眠について、多くのことを知ることで、世界観が広がります。何事も表裏一体です。
★皆それぞれにやる気と信念を持って頑張ってます。
★夜の睡眠実験はとてもおもしろいですよ。

高谷紀夫研究室　A613（地域文化コース）

地域文化コースは現段階では、研究室体制ではなく研究群という形が取られていますが、高谷先生と学部4年生のお二人にお願いして、登場してもらいました。

▲中央が高谷先生

▲右側は取材時4年生のお二人

【研究内容】

◆文化人類学・東南アジア民族学が専門です。
1．東南アジア大陸部の文化と社会に関する人類学的研究～ビルマ、タイがフィールドで、儀礼、神話、世界観の比較からその多様性と地域性の諸相について考察中。
2．儀礼・祭祀論～人類学の理論的領域では儀礼・祭祀論が中心課題。最近は、広島県内や南九州の祭礼の観察を通じてその歴史的変遷に関するデータの収集中。
3．「語り」の位相についての人類学的研究～「語り」（昔話伝承）の現場から、知識の階層性を内在する文化の全体像について思索中。
★日本社会の中の「医療」という一つの文化体系において、病む人と治療する人がどのような関係にあるのか、それが今日関心を引いている様々な医療問題とどうかかわっているのかということを、人類学的に考察しています。

【先生から学生の方について一言】

これからも人をホッとさせることに、誰よりまさるともおとらないように
これからも人を傷つけることへの鈍感さに、誰よりおとるともまさらないようにそのために言葉のもつ豊かさと貧しさに熟慮して下さい。
ひたむきな情熱、軽やかなフットワーク、憎めないドジ……が研究のコンセプトです。

【学生の方から先生について一言】

★私達が敬愛してやまない高谷先生の魅力を一言で語るのは難しいのですが、年代の差を感じさせない軽快なフットワークと、華麗な話術、そして、セミプロ並の歌唱力は、まさに、総科のさだまさしと呼ぶにふさわしいと思います。

【総科生にアドバイス、研究室のＰＲ】

◆分野を問わず興味のある研究分野の教官と、積極的に接触することをすすめます。これだけ多様な専門の研究者が揃っている学部は他になく、それを是非生かすべきだと思います。研究のネットワークの充実が視野の拡大につながるのです。
◆研究室には、東南アジアの文化人類学、民族学に関する文献がある程度そろっています。また現代における文化を考える手がかりが若干あります。「来る者は拒まず、去る者は追わず」で広く「文化を見るまなざし」に関心のある人は歓迎です。

学部記事 新任教官紹介・人事異動

新任教官紹介

柴田徹太郎（数理情報科学コース助教授）

10月1日付けで名古屋市にあります愛知県立女子短大から転任して参りました。専門は数学で、非線形微分方程式の固有値問題を変分法を使って研究しています。

出身は東京で、大学、大学院と東京で過ごしました。その後静岡県沼津市の沼津高専に勤め、前任校のある名古屋へ転任し、さらにここ東広島と、西へ西へと移って参りました。

趣味は下手の横好きの将棋ですが、最近はもっぱらテレビ観戦や将棋の月刊誌を読むことが主で、実戦はしていないので棋力は落ちる一方です。どなたか指導して下さる方がいらっしゃったら、どうぞ一手御指南下さい。

広島は初めての土地なので、新しい気持ちで研究に、教育に専心していきたいと思います。どうぞ宜しくお願いいたします。

陳　旭彦（数理情報科学コース助教授）

1995年6月16日より、アトランタにあるジョージア工科大学からこちらに参りました。私は学部・大学院ともに広大理学部数学科で学び、その後助手も務め、1990年に渡米しました。今までの人生の9/33を広島で過ごしたことになります。その間、総合科学部の多くの先生方にも大変お世話になりました。今回母校を再び訪れることができ、大感激していますが、ビザの取得は非常に難しかったです。大学では国際化が進みつつありますが、入国管理の方ではその変化に追いつけないようです。数理情報コースの水田義弘教授と吉田清教授をはじめ、総合科学部人事係の方々は忍耐強く交渉し、非常に苦労されました。この場を借りて、これらの方々に深く感謝申し上げます。

さて、私の専門は、非線形解析学で、自然界に観察される様々な時空パターンの自発的形成のメカニズムを、偏微分方程式などの数理モデルを通じて、数学の立場から研究しています。

故郷は中国の紹興です。古跡が沢山ある素晴らしい文化都市です。皆さんも機会があれば、一度訪れて見て下さい。

趣味というか、小さい子供と遊ぶことは大好きです。

口下手で、頑固など私は欠点だらけの未熟者ですが、最も目立つ欠点は二つあります。一つは、アルコール・アレルギー体質です。西条も故郷の紹興も酒の産地だというのに、酒屋ではいつもお茶やジュースを注文するので、情けない目でみられてしまいます。欠点二は、時間を守れないことです。約束をすっぽかしたこと数知れず、飛行機に数回、数時間乗り遅れたこともあります。これを京都のある認知科学の先生に話したら、“君の脳の時間感覚に関連するパートはきっと面白い構造をしている。ぜひ研究してみたい”とまじめに言われました。

そんな私ですが、宜しくお願いします。

佐藤高晴（自然環境研究コース助教授）

10月1日付けで新潟大学工学部機能材料工学科より転任して参りました。新潟大学では、学部では解析力学、電磁気学などの講義、大学院では磁気材料化学についてのゼミなど、物理関係の授業を行い、研究は、主に磁気的方法で地球環境変動を調べることを行ってきました。具体的には、深海底堆積物を用いた古地磁気学、深海底堆積物や火山灰に対するスピン年代測定、深海底対是器物中の生物起源と考えられる磁性鉱物量変動を用いた地球環境変動の研究等です。本学では、地学系に属し、地学概論、古環境学等の授業を行い、今まで行ってきた研究を発展させていくと共に、地学系はもとより、いろいろの分野の方とも協力して意義ある研究ができたら良いと考えています。

私は、関西にすんでいた学生時代に毎年のように行っていた六甲縦走で、汗をかきながら登った山が立入禁止になり、2～3年後には高層住宅が建ち並ぶ快適そうなニュータウンになっているのに唖然としたことがありました。そのとき以来、人間と自然の関わりについても考えるようになりました。総合科学部にはいろいろな分野の専門家がおられ、関心の高い学生も多いようですので、その点でも多くを学べるのではないかと楽しみにしています。

ここ西条は前任地新潟と同様の酒所、甘辛はかなり異なりますがいろいろ地元の酒を楽しんでいます。その方面も含めてよろしくお願いいたします。

村田晃嗣（地域文化コース講師）

10月1日付で着任いたしました。専門はアメリカ合衆国の対外政策、特に第二次大戦以降の東アジアにおける同盟政策です。目下“U.S.Troops Reductions from South Korea”という博士論文を執筆中です（いつ書き終わるかはお尋ねにならないで下さい）。

この9月まで4年間、ワシントンのジョージ・ワシントン大学というところに留学しておりました。もともとは神戸の出身なのですが、1月の大地震もワシントンでニュースで知りました（幸い実家は無事でした）。おかげで“Koji Murata from Kobe”というので、かの地でニュースに出てしまいました（日本でテレビにでることは少なくとも当分ないと思いますが）。

広島の地も大学で教えるのもまったく初めてのことですので、どうぞよろしくお願いいたします。

山本浩司（地域文化コース講師）

新しく10月からきました。それまでは早大文学部で助手をやっておりました。戦後のドイツ文学が専門ですが、せっかく「高度な教養教育」という崇高にして困難な課題をかかげた総合科学部の一員となったのですから、今後は視野を広げて、単なる「専門バカ」に陥らないようにしたいと思っています。とはいえディレッタントと後ろ指を指されるのもご免こうむりたいので、このあたりのかねあいは相当に難しいなというのが偽らざる心境です。

学生さんたちに関して言えば、かなりの優等生たちが総科には集まってきているようです（少々のお世辞を加味して言えば、ですが）。ただし気がかりな点が一つ。というのも総合的な学科や専攻では、しっかりとした問題意識を持っておかないと、カルチャーセンターに通う有閑マダムみたいになってしまうという話をよく聞くからです。いろんなものをつまみ食いして、結局何一つものにならないとか、いろんな店がでているのに、表通りのチェーン店や立派な店構えの高級料理店にしか行かないとか。その伝で行けば、「ドイツ文学」などはさしずめ寂れた裏通りにある貧相な洋食屋といったところでしょうか。けれどもこういう店が案外安くてうまい料理を出さないとも限りませんよ。お口にあうかどうかの保障は出来ませんが、どうか一度、暖簾をくぐってみてください。

関矢寛史（生体行動科学コース講師）

はじめまして。私は8月に、アメリカのルイジアナ州立大学大学院博士課程を修了し、10月にタイミングよく就職することができました。専門は運動心理学です。特に運動学習に興味を持っており、人間はどのようにしたら運動がうまくなれるかについて研究しています。私自身、スポーツを愛し、テニス、スキーなど様々な運動にチャレンジして楽しんでいます。アメリカ留学中も、忙しさのあまり一時期運動をしなかったら、ストレスで心臓が痛くなりましたが、ドクターの支持通り運動を続けたら痛みも消え、

何とか乗り切ることができました。また、大学の研究室の友達より、テニス友達のほうが多く、スポーツにすくわれた留学生の一人でありました。

また、私は大変な音痴で、音楽的才能が全く無いため、俗に運動神経がないとか、運動音痴と呼ばれる人の気持ちは痛いほどよくわかります。そのため、私の研究の究極のテーマは、運動の苦手な人がスポーツ万能になれるような、運動学習の方法を探すことです。本学部の教育・研究に貢献できるような頑張りたいと思っておりますので、皆様からのご教授、ご鞭撻をよろしくお願い致します。

森　秀樹（人間文化コース助手）

着任早々、怪我をしました。単純な事故だったのですが、私は不意を襲われて、なすすべもなく、次の瞬間には、路上に倒れ、顔面から血を流していました。たいした傷ではありませんでしたが、痺れた傷口には自分の身体ではないような違和感がありました。それ以上に、内と外を隔てるべき皮膚が破れて、内をめぐるはずの血が外へと流れ出るのは異様なものです。傷という文字は、死んだ人が蘇生しないことへの悲哀を意味していたそうです。身内を喪ったという悲しみはもちろん、人間は死ぬのだということを思い知らされたときの狼狽。すると、怪我で傷つくのは身体というよりも、むしろ、魂なのかもしれません。そう考えてみると、怪我という当て字もなかなか意味深く見えてきます。私の思い通りにならない不測の「事故」（これが怪我の原義です）によって、文字どおり、「自己」が怪しくなる瞬間、これが「怪我」の本性なのかもしれません。哲学や文学を手がかりにして、「私」のこのようなあり方について考えるのが私の研究テーマです。さて、すると私は「怪我」に支えられているということになりますが、これこそ「怪我の高名」ならぬ「怪我の巧妙」ではないでしょうか。

高野秀敏（数理情報科学コース教務員）

昨年10月16日付けで広島大学大学院工学研究科博士課程後期１年より着任いたしました。専門は数理論理学で、主にモデル理論と集合論のブール価モデルを用いた数理論理学の純粋数学への応用をテーマとしております。

現在25歳独身、自宅生(？)で、ＪＲとバスを乗り継いで通勤しております。小学校５年生の時に初めてコンピューターに触れ、それ以来コンピューターに興味を持ち続け、それが数理情報コースを選択する理由となりました。中学では卓球部に属し、大学に入って室内合奏団で１年ほどコントラバスを弾いていました。ふと振り返ると「卓球、ベース、コンピューター」という巷でいわゆるクラいと称される３拍子が揃っておりました。このクラさは音楽の好みや専門分野の選択にも少なからず影響しているようにも思えます。そんなちょっとクラい私ですが、どうぞ宜しくお願いいたします。

読者から 読者からの手紙　読者への手紙

田渕昌太（人間文化コース研究生）

あれは夏ごろのことだったでしょうか、自転車ではしっているとオニヤンマを見かけました。めずらしいトンボが飛んでいるなと思いつつしばらく行くと、今度はどこからかギンヤンマが飛んできて僕の自転車と並走（並翔？）していきます。こうしたことは一度や二度ではありません。僕は期せず、ちょっとした感概にふけってしまいました。こんな大型のトンボを目にしたのはいつ以来のことだろうかと。しかもここ何年間も見たことのなかった種類のものが、ここでは至るところを飛び交っている。ここは水の澄んだ土地なのでしょう。水の汚れたところにヤゴが住むことができないといいますから。

こうした事柄からでも、今ぼくたちがどれほど豊かな自然に包まれているかは容易に理解できると思います。しかし、たとえ美しい自然に囲まれていたとしても、その自然に意識的に目を向けることをしなければ、そこに自然は存在しないも同然です。いまこの西条の地でぼくたちのまわりにある自然はいわば空気のような存在なのでしょうか。失われるまでは決して気付かれることのないものなのでしょうが、その際、ひとたび壊されてしまうともう元に戻らないものがあるということを忘れずにいたいものです。

もちろん日常会話の話題として、ここは山ばかりだなどと言いはしますが、実際のところ西条での暮らしにさして不自由は感じられません。もし感じられたとしても、それは自然が豊かであることの証左にほかならないでしょう。多少の不便を厭うことなく、日常生活が豊かな自然に包まれていることを喜びたいものです。自然に対して、それを当たり前のものごとのように見過ごしてしまうのではなく、ここに存在するものとしてしっかり目を向けてみることが大切だとおもいます。

『飛翔』第49号をパラパラめくっていると、気になる言葉が目に飛び込んできた。それらは「競走社会に生きる」「責任」「自由」という言葉たちである。私たちは「競走社会」に生きているがゆえに、大学時代はそこから逃れてひとときの安らぎを満喫しているというのだが、これが事実ならば大変悲しい。なぜならその状況は「生きている」とはいえない、むしろ「埋没している」と思われるからだ。受験戦争という競走をくぐり抜け、現代社会という巨大な競走社会を後ろにひかえて束の間の休息に身を横たえる四年間が学生生活であるというのは救われない。若さは休み時間ではないのだ。もっと意識的、積極的に自分で組み立てていくものである現代という競走社会に罪をなすりつけることじたいは簡単だが、やがてその「社会」なるものを担っていく時期はぼくたちにも訪れる。そのときになると後続のより若い世代から、社会が悪いと責任を押しつけられることになるのだろう。

そう考えて憂いに沈む前にひとつ確認しておきたいことがある。大学生は社会人であるか否かということだ。もちろん就職していないという意味では社会人とは呼べない。『飛翔』には「社会からの声」というコーナーがあり、大学という場がいかにも社会外存在であるかのような印象を受ける。だがそうではない。大学そのものはいうまでもなく大学生自身も社会内の存在である。そのぼくたちが「社会が悪い」ということを口にするならそれは自分たちにも向けられた批判であるとおもうべきだ。社会といういまひとつ具体的でない言葉に逃げ込んでいると問題はいつまでも解決されない。自分の責任逃れに使うことのできる便利な言葉になってしまった「社会」という語。この語を自分たちの消極的な生き方の言い訳に使うのはもうやめよう。

社会が悪いと批判することが、自分たちへの非難に直結しているということ。意識的に注意を払わなければ、この構図すら見えてこない。他者に向けたはずの批判が自分に戻ってきているのだ。

この構図はたいへん重要だと僕はおもう。他者を批判するというときにその「他者」の中に自分を含めてみる。他者への批判をまず自分に向けてみるということ。他者に向けたい批判を、自分の中に「もう一人の自分」を用意して、そこから自分に向けて問を発してみるということ。それはいわば自分の中に「他人」を住まわせるということである。こうすることによって、ぼくたちは独断的、身勝手かつ無気力な思考から逃れられるのではないだろうか。これは、しかし、他人の価値尺度に拠って行動するということではない。自分の中に他者のまなざしを用意することによってこそ、しっかりとした自己を養うことができるのである。

「社会」を批判する態度を持つ人は「自分」をみずから批判するところまであと一息であろう。他のだれでもないほんとうの自己を養うということは、このように「自分の中の他者」を用意するという作業につきるとおもう。その過程で人間としての「責任」が生まれてくるのだろう。なぜならすべての無責任な行動、発言は、この自己批判機能が有効にはたらけば消え去るはずだからだ。

「責任」に対比しうる語は「自由」だろうが、「自由」ということは無目的、無責任ということとは違う。前号のアンケート記事（編注：コース紹介）によると人間文化コースはいまひとつ先が見えてこないところであるらしいが、これは自分が無目的であることの責任をコースになすりつけているにすぎない。人間文化コースに所属して先が見えないという人は、自分自身に先が見えていないということを宣言しているが、自分ではそれに気付いていないということだ。このような人は自分の無目的性に意識的になり、それを乗り越えねばならない。そのときにこそきっと先はひらけてくるのだろう。

「自由」という言葉のもとで、無責任、無目的、無神経に甘んじていいものではない。自分を取りまく状況とそして何よりも自分自身に意識的に目を向け自分をしっかり確立したうえで、さまざまなことに対処していかなければならない。周囲に対して意識的であれ、自分に対して意識的であれ、ということをここでぼくは強く主張したい。

こうした過程において「自由」は「責任」によってかなり拘束されるだろう。しかし、ぼくは「自由」と「責任」の調和したところに、よい「社会」が出現するのではないかとおもう。「責任」によって駆逐される「自由」の大部分は無責任、無目的、無神経の領域にあるものだろうから、あまり問題はない。

現代の諸問題に立ち向かっていくために、いわゆる専門深化型とは理念を異にする総合科学部においては、現在アプハチ取らずに終わりかねない学問的自由が出現しているのではないでしょうか。何の関連性もなくやたらと広い分野に首を突っ込めばいいというのではない。問題を総合的に捉え、かつ解決していくためには、やはり大前提として、しっかりした自己の確立ということが必要になってくるとおもわれるのです。クモの巣の中央にクモがいなければどんな獲物がかかってもどうしようもありません。これは、ぼくたち学生自身の責任だとおもいます。なんの主体性もないところでは、総合科学部の長所はみな弱点に早変わりするだろうからです。

総合科学部がただしく発展するということと、ぼくたち学生が実りある日々を送るということとは実は同じことでしょう。自己を確立し、自分の立脚点を確認しつつ、視野をひろげていくという姿勢、これこそが人間としての成長、そして学問的発展においての本質であり本道であるとおもうからです。

私達の飛翔49号に対して、ご好意ある長文を寄せられたことに感謝します。
さて、あなたのご意見の中でで誤解されていると思われることに関して、2点ほど付言します。
一つ目は、私達が学生の政治的無関心を単純に社会のせいにしているわけではないということです。「社会状況は私たちに何を感じさせたか」という章題は、のちにその私たちが当の社会の一員であることを述べるための布石としてでありました。
二つ目は、あなたが「自己責任の確立」を主張されていることに関してです。私達も社会批判の矛先を自分自身にも向けることの大切さを述べました。それによって、当面は、自己が依ってたつところを確保し、その立場から「責任」ある行為をする事ができるようになるでしょう。しかし、一度自己自身に向けられた批判はどんどん自分自身をほりくずし、もはや社会や他の人々を批判する根拠を保つことができないようになるでしょう。このとりとめもない次元を明らかにし、ここをこそみんなと一緒に歩む道のりの出発点とすることが先の特集の目論見だったのですが、このことが私たちの主張をわかりにくくしてしまったのかもしれません。（49号学生編集長：篠崎陽平）

編集後記

早瀬光司（編集長）

飛翔の編集長を引き受けてちょうど2年経ち、その間4号発行したことになる。思い返せば、榊原さん、篠崎君、照屋君という個性と活力あふれる学生編集長といっしょにやってこれたからこそ、手前味噌かもしれないが、飛翔をより良く練り上げ磨き直してこれたように思う。

これまで「研究室紹介」や「より良い授業を目指して」などの新機軸を打ち出し、また社会からの声には、本号では東広島市議会議長と東広島リビング新聞社編集長にお願いすることができた。本50号を立派に(？)発刊することができたのも、メインの大特集である統合移転完了行事等を含め、学生編集長はじめ学生編集委員の人達の並々ならぬ編集作業に負うところが大であり、彼らの汗と涙(？)の賜物である。

次期の学生編集長は渡邉君と聞いているが、4月から入る新編集委員も混じえ、照屋君にも強力にバックアップしてもらいながら、これまで以上により良い誌面を提供していけるよう学生諸君の奮闘を大いに期待しつつ、今後の飛翔を見守っていきたい。

「学生編集委員は良く頑張ってくれました……。」

照屋　敦（学生編集長）

生来の怠惰に加えて、肩書きがつくと余計に無責任になるという性癖のため、学生編集委員のみんなをはじめ、いろんな方々に迷惑をかけてしまったと思います。どうもすみません。また、企画倒れ・没原稿の関係者の方にこの場を借りて深くお詫びします。さらに、個人的にはフェニックスフェスタの取材を通じて大いに得るものがあったのですが、それを紙面に活かせなかった事を読者の皆さんにお詫びします。記事がつまらなかったとしたら、全て私の責任です。　なーんちゃって

「今後の取材日程は…」

原森義則

今回は取材および編集作業を欠席したり、おまけに原稿の〆切まで遅れてしまって他の編集委員に多大の迷惑をかけてしまいました。飛翔はみんなが思っているような怪しい集団ではないので、恐がらず、一度編集室まで来てみて下さい。パソコンの使い方も学べます。

「超オッケーすよ」

渡邉忠信

飛翔に携わってはや一年。取材は楽しい。記事を書くのはきついが、編集するのはもっときつい。しかし、一番きついのは学生に読んでもらえない事だ。魅力がないのは編集委員の責任だが、そんな中で学生から声が返ってくると、たとえ批判であっても本当に嬉しい。手ごたえのある仕事なんて滅多にないのだろうが、読んで下さった読者の皆さんに感謝します。

「おお、新記録！」…？

佐々木　将

前回は理転(理系転向)の準備やら何やらを理由に編集作業をさぼりまくっていましたが、今回は決意を新たに自分なりに取材・編集に打ち込めたと思います。とにかく忙しかったけど、取材・編集の過程でいろんな人と知り合い、色々なことを感じ学ぶことができ、自分にとってとても有意義な体験になったと思います。

疲れて片付ける気力もない

野田忠幸

前期私は、編集活動の最もあわただしい時期に一人自転車とともに旅に出てしまいました。後期はもっと頑張ろうと気合いを入れましたが、編集長にはいつもお叱りを受けていましたね。今回研究室紹介を担当させてもらい、いろんな先生のお話を直接聞けて貴重な体験ができました。それにしても先生方はとてもお忙しいですね。そんな中ご協力ありがとうございました。もっと詳しく研究室の雰囲気や研究のお話など伝えたいことがあったのですが、僕の力不足です。どの研究室もとても魅力的でした。一度おたずねしたらいかがでしょう？

三輪誠一郎

忙しくて疲れました。原稿を書くのがこんなにつらいとは思いませんでした。スタートレックは記事になったでしょうか。(載らないことを祈る。)

「We want you!」

編集委員

教官：早瀬光司（編集長、自然環境研究コース助教授）・園府寺司（人間文化コース助教授）・富樫一己（自然環境研究コース助教授）・林光緒（生体行動科学コース講師）

事務：頓田武男（学生係長）・上代裕久（学生係）

学生：照屋敦（学生編集長、人間文化コース2年）・原森義則（外国語コース2年）・渡邉忠信（社会科学コース2年）・佐々木将（1年）・野田忠幸（1年）・三輪誠一郎（1年）・田中裕子（物質生命科学コース3年）・公文奈弥（物質生命科学コース3年）

飛翔伝言板

●卒業生への通信

前号でもお伝えしましたが、次号51号からは卒業２年目以降の方に対しては、希望者にのみ郵送することになりました。そこで、引き続き『飛翔』の郵送を希望される卒業生は1996年７月末までに下記の住所宛にハガキでご連絡下さい。

〒739　東広島市鏡山1-7-1　広島大学総合科学部飛翔編集委員会

●おわびと訂正

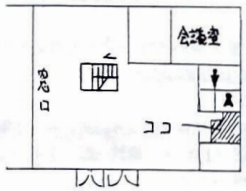
飛翔49号の卒論紹介の記事において、一部の方々のお名前に間違いがあり、関係各位に大変ご迷惑をおかけいたしました。おわびして訂正いたします。

39頁の地域文化コースの指導教官名「谷紀夫」は髙谷紀夫先生の間違いでした。同様に、40頁の外国語コースの学生名「口文乃」は樋口文乃さんの間違い、物質生命科学コースの学生名「小彰久」は小柳彰久さんの間違いでした。以後、このような事がないよう、校正には十分気をつけますので、何卒ご容赦下さい。

学生編集委員・原稿募集

飛翔では学生編集委員を募集中。
理屈や技術はとりあえず不要。
必要なのは、あなたの勇気とやる気だけ。
先輩たちによってつちかわれて来た「秘伝」が
編集作業を通してあなたに授けられるでしょう。
でも、それをどう活かすかはあなた次第。
企画、取材、原稿依頼、執筆、編集。
あなたにしか創れないページがあります。
飛翔を面白くするのは
あなたです。

写真やイラスト、エッセイ、記事などもどんどん
持ってきてゲロ。
ご意見、ご希望も
待ってるゲロ。
事務棟１階入口を
入って右に飛翔編
集室があるゲロ。



安芸の秋は賀茂にカモン！

▲女の子に人気のおでん

▲おひねりはご遠慮ください。

恒例・秋の大学祭

11月３日から５日にかけて行われた大学祭には、大勢の見物人が押し寄せた。

並行して行われていたフェニックスフェスタ同様、にぎわいを見せていた。

◀限りある資源。有効に浪費しましょう。

▼ボリュームたっぷり。ジューシーでした。

▲兵（つはもの）どもが夢の跡。